

『われらの時代』論：戦後認識を中心に

蘇，明仙
九州大学大学院比較社会文化研究科

<https://doi.org/10.15017/15981>

出版情報：Comparatio. 4, pp.23-34, 2000-03-30. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



『われらの時代』論―戦後認識を中心に―

蘇 明仙

1

日本文学において、〈性〉が文学のテーマとして問題意識を持つて取り上げられたケースといえ、まず思い出されるのはいわゆる自然主義の諸作品であろう。しかし人間の〈性〉が一つの思想的傾向を帯びて「真面目に」扱われるのは、戦後になってからである。それは戦後の文学が人間実存の問題を主な特徴としながら現れるのと殆ど一致している。〈性〉に対する思想的な態度、〈性〉の本質を追究することは人間の本质を追究することにつながり、戦後の社会・政治的状况における現代人の人間性回復の問題に帰結する。〈性〉に対する思想的なアプローチは、戦後派の野間宏や武田泰淳などにすでに見えるが、わけても性的なものを徹底的に意識化し、〈性〉そのもののなかへ入り込んで、〈性〉を書くことによって現代の日本人を描き出すことができる信じ、〈性〉の方法的追求に没頭した作家として大江健三郎が挙げられる。

「芽むしり仔撃ち」(「群像」昭三三・六)までの作品に見える「牧歌的な少年たちの作家」から「反・牧歌的な現実生活の作家」(注一)への宣言以後、即ち〈性〉を「文学的に考える」段階において、「性と政治との統一的把握」(注二)という苦闘が大江文学の最大の課題となる。その〈性〉と〈政治〉というテーマの第一作と言えるのが「われらの時代」(「中央公論」昭三四・七)である。「われらの時代」は大江が二十三歳から二十四歳までほぼ一年間を費やした最初の書き下ろし長編小説で、過多な観念的性用語を駆使しているとしてあまり評価されなかった作品

である。論者はこの作品を取り上げ、〈性〉を媒介とする、大江の戦後認識を軸とした読解を試みるものである。

2

「色情狂の失敗作」(注三)などと、発表当時さんざんな悪評を蒙った「われらの時代」は、冒頭から小説の全般にわたって性的用語が滔々と溢れ出る。この大江の創作における冒険は様々な誤解を引き起こした。小説の理解にプラス効果になるかマイナス効果になるかはさておき、大江は小説の補充説明ともいえるエッセイを急いで発表しなければならなかった。「われらの性の世界」(「群像」昭三四・一二)はその代表的なものであろう。

大江は現代の人間を「政治的人間」と「性的人間」という多少図式的な枠にはめて把握しようとする。偏光グラスの照らし出すそれぞれのベクトルがそれぞれの方向に向かってそれぞれの色を放つように、「政治的人間」と「性的人間」とは相対立するものである。「政治的人間」が行動において他者を解消しようとするのに反して「性的人間」はすべての対立・抗争を避け、想像の世界で他者を解消し、他者との合一を追求する。大江が「性的人間」として規定している戦後日本の青年は、時代に対する憤慨も反抗も引き起こすことのできないまま生きていくのである。

主人公南靖男は二十三歳の仏文科の学生である。彼は十年も、年上の外国人相手の娼婦である頼子と同棲している。大学生と中年の娼婦という組み合わせは「われらの時代」が最初ではない。昭和三十三年六月「文学界」に発表した短編「見る前に跳べ」においてすでに見られる設定である。大江はその後「見る前に跳べ」、「暗い川おもい權」(「新潮」昭三三・七)、「不意の唾」(「新潮」同・九)、「喝采」(「文学界」同・九)、「戦いの今日」(「中央公論」同・九)などの短編を集めて新潮社から『見る前に跳べ』

として刊行する際、その後記に「強者としての外国人と屈辱的な立場にある日本人、その中間者としての外国人相手の娼婦という三者の相関を描くこと」がすべての作品に繰り返されている主題であると語っている。

「われらの時代」もその枠組みの一つということになるが、大江が「性的なるもの」を最初に小説の重要な因子として考えたのは「われらの時代」だといっているように、「性的なるもの」により一層の力を注いだのは「われらの時代」においてであろう。「われらの時代」の主題については「現代日本の青年一般をおかしている停滞をえがきだしたいと考え、性的イメージを固執することでありアリスティックな日本の青年像をつくりだすこと」（注四）を意図したと明言している。「性的人間」の典型ともいえるべき「われらの時代」の主人公たちを通して「停滞しているものの不幸」、「現代日本の性的人間としての青年の不幸」がどのようにに現れているかを見てみよう。

希望、それはわれわれの日本の若い青年にとって、抽象的な一つの言葉でしかありえない。おれがほんの子供だったころ、戦争がおこなわれていた。あの英雄的な戦いの時代に、若者は希望をもち、希望を眼や唇にみなぎらせていた。それは確かなことだ。ある若者は、戦いに勝ちぬくという希望を、ある若者は戦いがおわり静かな研究室へ陽やけして逞しい肩をうなだれておすおすと帰ってゆくことへ希望を。希望とは、死ぬか生きるかの荒あらしい戦いの場にいるものの言葉だ。そしておなじ時代の人間相互のあいだにうまれる友情、それもまた戦いの時代のものだ。今やおれたちのまわりには不信と疑惑、傲慢と侮蔑しかない。平和な時代、それは不信の時代、孤独な人間がたがいに侮蔑しあう時代だ。（二一九頁）

戦いの時代には若者において希望が、友情が、広大な共生感があふれたが、戦後の平和の時代には不信、侮蔑しか残っていない。この中で日本の若い学生たちは「裸の体にじつとしがみつかれて動きがとれない、やりきれない」とわれわれの状態」にある。「精神的なインポテンツ」という病疫が日本の青年たちを侵しているのである。大江において戦争は「人間の英雄性への幻想を刺激する遠いこだま」（注五）のようなものである。平和な時代にはどんな挑発的な実践の機会も残っていない。ヒロイズムを可能にする戦いの時代というものは、昭和三十年代の現実においては理想の喪失とともにやはり見出せないものとなっている。

靖男は「日本人であり若い知識人であるというだけでおさきまっくらに閉ざされている」と思っている。自分が日本の若い知識人であることはもちろん、日本という国家それ自体までも否定している。大江のエッセイ「戦後青年の日本復帰」（『中央公論』昭三五・九）には現代日本の青年の精神傾向について述べていくだりがある。そこで大江は、日本の青年は国に対する嫌悪感を持っていて、一般に日本から、日本人からの脱出を望んでいると語っている。このような日本に対する居心地の悪さは靖男をして自分を、日本の青年をとらえている「精神的なインポテンツ」からの脱出を企てるようにする。それが「反行動的・反英雄的な生活」から逃れ出る唯一の道だからである。

靖男は疲労からやどかりのようにとじこもって殻のなかでぐったりしてヘンリ・ミラーを読んでいた。（中略）アジア、アジアというだけでも心がふるえる、おれの心はアジアという言葉にふるえない、と靖男は苦い味を舌にのこす後悔のような感情といっしょに考えた。《この後悔、それは日本の若い青年の

生まれつきの後悔、皮膚が黄色いということへの後悔のようなものだろう。しかし黄色い皮膚をえらんだのは神であるが、アジアの民族という言葉にふるえぬ心をえらんだのは明治以後の日本人であり、おれだ。ヘンリ・ミラー、このあまりにも西欧的な男の胸をジンのようにやくアジアは日本をふくまない、それは蒙古、チベット、インド、支那だ。日本は心をふるわせるアジアでない。(後略)≒(二六七〜一六八頁)

「アジアの民族という言葉にふるえぬ心をえらんだのは明治以後の日本人」というとき、「明治以後の日本人」として生まれたことに対する後悔とその底辺に置かれている嫌悪感は、作者である大江の心境といつて良いであろう。明治以後の日本とは軍国主義による侵略戦争を始めた日本であり、天皇制に代わって民主主義が試行されているにもかかわらず、その理念が守られていない、そういう現実に対する大江の焦燥感と解釈することができる。

「われらの時代」が出る寸前の社会的雰囲気アメリカ従属下のそれに絞ってみると、砂川町漁村内瀬村の米軍基地建設決定(昭二七・九)、第四次吉田内閣の内瀬接收決定による闘争(同・一〇)、立川基地拡張反対運動(昭三〇・七)、米軍立川基地拡張のための警官隊出動、強制測量開始、警官隊と反対派との衝突、いわゆる砂川闘争(同・九)が始まり、小説の中では民学同の組織力を力説する左翼青年の八木沢が全学連の砂川闘争の失敗を非難する話の中に絡んでくる。続いて沖縄米民政府の基地永久化のためのプライス勧告(昭三一・六)、砂川町第二次強制測量、その反対派との衝突による多数の負傷者発生、政府の測量中止決定(同・一〇)、相馬ヶ原射撃場米兵の日本人農婦射殺、ジラード事件(昭三二・一)、砂川闘争参加者弾圧(同・一)、瀬長那覇市長追放のための米高等弁務官の選挙法改正(同・一一)、ジョ

ンソン基地の米兵による西武電車発砲事件(昭三四・九)が起き、「われらの時代」が発表される昭和三十四年には日米安保条約改定阻止国民会議が結成され、東京地方裁判所の伊達裁判長が米軍駐留は違法、砂川事件は無罪と判決したのが三月のことである。

このように続々とアメリカによる屈辱的な政治的事件が起こった。昭和三十年代といえ、日本社会は窮乏と混乱の戦後を克服して安定と繁栄を迎える時期である。しかし一方で、新しい時代にふさわしい思想と行動と指標を有さない若者たちには暗鬱な時期でもあった。暗鬱さの原因として確然と現れてくるのがアメリカによる政治的・経済的支配であることは否定しえない。

しかしこの小説をアメリカによる従属的な状況にだけ短絡させて読むのはあまり意味を持たない。「強者としての外国人と屈辱的な立場にある日本人との中間者」として規定されている中年の娼婦頼子が象徴するものに関しては二つの解釈が可能である。

その一つは戦後の日本である。靖男はすでに「頑丈で事務的でひねこびており荒あらし」くなっている頼子の性器が外国人に所有されるのはいが、「膝のうらがわや尻のくぼみ、ふくらはぎ」などの「頼子の感情や精神」とつながるところを通じて頼子にふれることには平静でいられない。それは「日本人のひそやかな内面」にかかわってくるわけで、我慢できないのである。靖男は頼子Ⅱ戦後日本がアメリカにその内側まで陵辱されていることに対して憤怒せずには居られないのである。

もう一つ考えられるのは、頼子は大江にとつての戦後文学である。中年女の頼子を靖男は「決して棄てることはできない」「おれは一生、この老けこんでいる外人相手の娼婦をみすてて捨てる事はないだろう」と靖男が言うように、頼子は彼にとつて決して見捨てる事ではない存在である。しかし、矛盾するのはその頼子と一緒に靖男はどんな出発も選択も行動もできないということ

である。

大江は「戦後文学をどう受けとめたか」(「群像」昭三八・二)で、戦後文学の継承者の一人として自分が受け継ぐと思ったのは、政治とセックスの問題であるとし、そしてその立場を選んだ大江の日本の戦後文学者たちに対する不満と彼自身の抱負を語っている。

日本の戦後文学者たちは、カミユのように自動車事故で死にせず、サルトルのように小説の文章と別れもせず、そうかといつてノーマン・メイラーのように切実な転身をはかりもしないようだ、ということである。毒の方向から衛生食品の方向へ、ロッククライミングの場所から家族づれのピクニックの方向へ、このようにずるずると生きのびてゆく人びとの見た地獄なら、とくにぼくが畏怖することもないかもしれないと思うことがある。いわば戦後文学者のフットボール・チームの失点とぼくが見なしているところのことだ。(注六)

常に念頭に置いた政治とセックスの問題に向かって自分は毒の方向へ、ロッククライミングの場所へ行く決意をする。

こうして見る時、靖男にくっついて存在、それも中年のベテランという設定の娼婦を、大江にとっての戦後文学として解釈するのも無理ではあるまい。

日本の若い青年に希望と呼ぶべきものがありえないと信じ込んでいる靖男は現在の「女陰的世界」、すなわち性交渉後頼子によって裸のままじつとしがみつかれて、動きのとれない状態が象徴するような世界からの脱出を企てる。つまりフランスの書店と日本の新聞社が共同で開催した懸賞論文―フランス文化と日本文化の相互関係についての論文応募に投稿する。結果は一席に入賞し、

三年間留学する資金をもらえることになる。その機会は靖男にとって「反・行動的、反・英雄的な生活からの脱出」の唯一の機会であった。しかし靖男にとって直接的な理由はいかなるものであつても、その出発の希望が挫けてしまう。それは彼が作者によつて最初から「同胞とか連帯とかいう言葉よりも、自由とか孤独とかいう言葉のもつ感情世界に馴染んで生きている青年」、つまり「性的人間」として設定されているからである。活動家のコミュニストにもなれなければ、アラブ人との連帯もできない。「永遠の行動不能の状態にある者ら、生まれつきの不能者、非行動的な膠着状態におとし入れられている者ら」の典型を為しているのである。

弟も、日本を脱出する機会をもすべて失った靖男。彼の目の前に貼られているフランス留学の次回の懸賞論文募集ポスターの文句―「若者たちよきみたちの時代だ!」―からは微妙な響きが伝わる。その後フランス文学研究室では、「絶望的なむちやくちやを長いあいだしやべりつづけたやつが勝」つ《絶望あそび》に代わつて、《拷問あそび》という磁石発電機の電流を性器や両耳に通じる拷問が流行し始める。何も変わったことのない状況の中で、宣伝文句の「きみたちの時代」なんかありやしない。あるものは自殺の機会に追い込まれながらも、ありふれた自殺さえできない、停滞と閉塞の「われらの時代」だけである。「若者たちよきみたちの時代」だと鼓舞する外部世界に対して現代の若い世代が見せる反応というのは何もないのである。

「われらの時代」は「観念的な失敗作」であると言われる。これは大江が現代日本人を「政治的人間」と「性的人間」という枠組みの中で把握しようとする、あまりにも意識的な操作がもたらした結果であろう。たとえば主人公の靖男と《不幸な若者たち》、特にドラマス奏者の高征黒の場合は、非行動的で無気力であり、

希望を持ってない停滞した社会の中で生殺しにされ、落ちこぼれていく人物として描かれている。更にこういう人物の描写は、ねつとりした性的用語で塗りまぐられている。これに反して希望—アルジェリア民族戦線の極東代表部をつくる目的で滞在しているアラブ人と、『民学同』のリーダーである尖鋭なコミュニストの八木沢に対しては、性的な描写の適用から除外されている。むしろ彼らに対しては精神的にも、肉体的にも鮮やかな健康美が溢れるように描かれている。

この点から作中人物の非現実性の問題も出てくる。まず何より目立つのが大学生と中年の娼婦を繋げていることである。二人の出会いや同棲に関しては何の動機付けもなしに、靖男は女陰の世界に滑り込んでしまう。このような大学生の設定は作者がイメージする「性的なるもの」、「性的人間」としての日本の青年を描くのに何より適当だったのである。大江はセックスについて「自分で行動しながら観察できる」ものであり、「意識を持つ人間が夢中になって動物的であると同時に再構成することができるめずらしい人間行動だ」（注七）と語っている。だから「性的人間」の場合、「政治的人間」になり損ねた知識人でなければならなかったのである。

一方、人物設定における非現実性は八木沢にも顕著である。靖男と同級生である八木沢は学生運動の指導者の一人で大学当局からマークされている人物である。この若いコミュニストは社会主義の未来を、友情にみちた世界を確信している。「友情 *amitie*」それが男らしい意味内容をしっかりおびて八木沢の言葉、八木沢の体、八木沢の微笑、それらすべてを光輝やかましく充実させているのである。未来に対する希望も、充実した友情も持っていない靖男とは対照的な八木沢は、靖男より五歳も年下である。この八木沢に対して三十五年生まれである靖男は「三十五年生ま

れと四十年生まれ、これは決定的にちがう」と考える。二十三歳と十八歳の同級生という設定においては、靖男が五年も浪人して大学に入った可能性としても考えられるが、やはり作者の意識的な操作によるものである。三十五年生まれの靖男は同年生まれの大江自身とダブって設定されていると考えられる。

「われらの時代」の人物は、現実味を犠牲にしてまで靖男を中心に巡らされている。大江の中では個人的体験や認識を一般化しようとする意識があるようである。自分の戦後体験に説得力を持たせるために、作者の分身とも言える靖男にやや度外れなほど深く入り込んでいるのではないかと思われる。

性的イメージによって描かれる時代の精神的状況、それは勃起しながらも射精できない、最後の絶頂まで行つてはその絶頂感からは拒まれる性的挫折、青春のエネルギーの発散の失敗である。大江は日本の若い世代、特に主人公南靖男を通して、行動することができない、何かの理由によって挫折させられてしまうような状態を見ているのである。

次に『不幸な若者たち』を通してもう一つの青年像を眺めてみよう。

3

浅田光輝と橋川文三との「若い世代と思想の転回」（『日本読書新聞』昭三四・八・三一）という対談の中で、橋川は若い世代の思想的傾向を四つに分類する。現在の大衆社会的な状況に同調している享樂的な思想無関心タイプ、戦後の思想体験から何か継続的な価値を見いだそうとして、戦争責任論や転向論に関心を持つているタイプ、戦後の状況の中から独自の思想を見つつけようとするタイプ、新しい国家主義的なものに心酔しているタイプ、—例えば石原慎太郎のようなタイプ—の四つである。（注八）

吉本隆明はこの四つにもう一つの類型—現在の独占体制に絶望

し、その絶望の本質をつかみ得ないでもがいているタイプを加える。その例として、大江のようなタイプを挙げており、危機感と停滞感に陥っている独特な世代であるという。更に大江の「われらの時代」については「わかい世代の思想と行動の様式を、いまの社会状況のなかでとらえてみせた注目すべき作品」(注九)だとし、スキヤンダルを巻き起こすことにしか快楽を感じないアプレ享楽派の無頓着な振る舞いにさえ「思想的な意味」を与えるのに成功していると評価している。その時、吉本のいうアプレ享楽派とは他ならぬ《不幸な若者たち》を指しているのであろう。

《不幸な若者たち》は三人の若者で構成されている、日本で最年少のジャズ・トリオである。ピアノ奏者である靖男の弟南滋(十六歳)、ドラムス奏者の高征黒(二〇歳)、クラリネット奏者田谷康二(十六歳)、この三人の夢は大型のトラックを手に入れて旅行することである。

ところが、《不幸な若者たち》というジャズ・トリオの名前には注目すべき点がある。《不幸な若者たち》は、《怒れる若者たち》という言葉と対照的でありながら微妙なつながりを暗示している。イギリスの劇作家ジョン・オズボーンの昭和三十一年作「怒りをこめてふり返れ」の初演以来、主人公のジミー・ポータは失望、不満、焦燥といった同世代の若者の精神状況の象徴的存在となり、この作品をきっかけに《怒れる若者たち》という用語が流行し始めた。この語の起源はレズリー・ボールの自叙伝『怒れる若者たち』(昭和二十六年)まで遡るが、特に昭和二十五年代のイギリス文化の伝統に不満を表明し、特に中産階級の偽善的で、保守的な姿勢、倫理観などを批判する作家の一群に与えられた用語として知られている。「われらの時代」の《不幸な若者たち》は、このような戦後の一世代《怒れる若者たち》を強く意識して作り出されたに違いない。ジャズ・トリオ《不幸な若者たち》

が《怒れる若者たち》ではなく、《怒れない若者たち》という意味として受け容れられるのもその点に起因するだろう。つまり怒るべき若い人たちが、女陰の世界に溺れ込んで一切の行動もできないまま日々を過ごしている。その現代日本の青年こそ不幸な若者たちなのである。

「われらの時代」の頃の大江文学の特徴の一つは風俗的なものを反映しているということにある。

《不幸な若者たち》のビッグ・ヒットソング《おお、レディ、良い子にしなよ》は、実際昭和十一年四月ベニーグッドマン・トリオが吹き込んだ曲である。ベニーグッドマン・トリオはドラムスのジーン・クルーパーやピアノのデヴィ・ウィルソンなどで構成されている。西アフリカから強制輸送された黒人奴隷をその先祖としているジャズが、最初に日本に輸入されたのは大正時代であった。昭和二年から昭和十五年頃まで隆盛をみ、第二次世界大戦の進展につれ軍国主義・反米方針によって数年間空白の時期もあったが、急速に若い人々の心を捉えたのは、敗戦後米軍の駐屯と時期を共にする。ジーン・クルーパーの来演(昭二七・四)以来ルイ・アームストロング一行(昭二八・一二)、ベニーグッドマン・トリオの来日(昭三一・一)などがジャズ・ファンを熱狂させ、「われらの時代」が書かれた昭和三十四年にはジャズの人気は最高潮に達する。世界的なジャズの熱風はその後(怒りの十年間)或いは《ジャズの十月革命》と呼ばれている一九六〇年代を迎えるに至る。《不幸な若者たち》は既成体制に対する反抗の意味としてブームになったジャズをその背景としているのである。その他にも、作品の中でナット・キング・コールやエルヴィス・プレスリーなどの曲が流れているなど、この時期の大江は風俗的なものを積極的に導入していたことがわかる。

ある日《不幸な若者たち》は大型のトラックをかうお金のため

というより、単なる面白さで天皇歓迎のパレードに右翼として雇われる。戦争の時代、天皇陛下の赤子であったころを黄金時代として覚えていた高征黒が幼児の時から抱く天皇のイメージは、二人の日本人の少年たちとは違っている。高にとつて天皇は、奉安殿の御真影の記憶と共に神様のように君臨していた。しかし彼らは本当天皇が「のんびりして静かにしてい」る男に過ぎなかったことに幻滅し、その《静かな男》をびつくりさせる気になる。天皇の乗っている車の前に爆弾を破裂させ「インペがびつくりして日本中がスキヤンダル」に包まれるべく計画するのである。

しかしその計画は失敗に終わり、それによって仲間中に悶着が起き、度胸だめしの爆弾破裂は少年たち自らを破壊させてしまうという悲劇的結末を迎える。

《不幸な若者たち》において注目すべきことは、《性》の文学的テーマによつて《政治Ⅱ天皇制》を批判しようとすることである。大江は現代日本の社会体制の中で根を下ろすことのできない若い世代の衝動的・自滅的行為を戯画化することに止まっていない。彼らの行為、即ち既成の価値と偶像を破壊していく過程において、現在の政治に対する批判を加えている。《不幸な若者たち》を通して、大江の現政権に対する反抗的な思想を読みとることができる。すなわち大江が乗り越えるべきであり、破棄すべきものだと言張している天皇制が、《性》的なもの・《性》的な表現によつて批判されているのである。

壇上に男は発情しきっている、かれの生殖器は充血して分泌をつづけている、かれは生殖器をつきだし《牝の姿勢》をとつて、猛々しい牡の襲来を待ちのぞんでいる。《ああ天皇陛下、天皇陛下の独裁こそわれわれの感泣してお迎えするものである》感泣している牝へ猛々しく独裁者はのしかかってくる、か

りたてられた牡として、鼻息も荒く、勃起しきつて死ものぐろいの牡として。(一九二〇—一九三頁)

というふうに性的な表現を借りた右翼に対する露骨な揶揄は、作者の天皇制下の体制に対する批判であることは言うまでもない。「われらの時代」は、六〇年代の《政治》と《性》の問題を典型的に描いていると言われる「セヴンティーン」(「文学界」昭三六・一)及び「政治少年死す」(「文学界」同・二)への萌芽とも言えよう。

《不幸な若者たち》も大江の観点に即して見ると「性的人間」の一つの類型である。彼らが置かれている状況に希望と言えるものはなにもない。その中で青春の生命力を発散する道は四方が塞がれている。結局彼らはエロティシズムと暴力にしか没頭できない。彼らが政治的な問題に暴力的に関わるのは、それが彼らに快楽を提供することのできる危険性を内包しているからであり、彼ら自身に社会・政治的問題に対する怒りの感情があるからではない。彼らにとつて憤怒は最初から存在しなかった。その彼らにおいて暴力とは、噴出口を見つけられなかった青春のエネルギーの無造作な発散という意味しか持っていない。このような現実に対する改革と抵抗の意志からではない彼らの政治的な行動は挫折に終わることが予定されていたのかも知れない。

《不幸な若者たち》の中で、特に注目すべき人物はドラムス奏者の高征黒である。高は「性的な倒錯者」であり、朝鮮戦争でこまれた「慰安婦的な凄腕の男色家」である。朝鮮人である高が彼も日本国民であり、「陛下の赤子」であると思ひこんでいた戦争時代のことを「黄金時代」として懐かしんでいる。彼は戦争が永遠に続き、日本陸軍の兵士になって天皇陛下のために死ぬことを願っていた。戦争時代こそ「天皇の身内」の一人であり得る時

代だったと回想するのである。このように異常な性の世界の人間として設定されている高を通して、作者は何を描きたかったのだろうか。

危機、あの夜もまた危機だった。黒人の歌手がかれにひきおこした性的な昂揚を、仲間から見張られること、そしてかれの性的な倒錯を感じられる危機。かれは腿に爪をたてて、死ものぐるいで我慢したのだ。しかし、かれにとって同性愛は、名誉回復の儀式である。民族的な序列を一举にひっくりかえし挽回するための息苦しい儀式だ。かれは西欧の人間、あるいはアメリカ人、どちらにしても白人としか寝なかつた。夜がかれと白人とおおうとき、かれは横たわつてぐにやぐにやしている白人に鉄の堅固さをもつていどみかかる。かれは白人を支配し、白人を哀訴させ、白人をくみふせる。東洋はかれの硬い性器を武器にして西欧を鶏姦する！射精しおわつて晴ればれたかれの清らかな体躯にみなぎる勝利と優越、直腸にぬるぬるする粘液をそそぎこまれ一種の下痢の感覚におかされている者にたいた、男らしい勝利と優越。(二二三～二四頁)

政治的に惨めな立場にいる高征黒は、アメリカ人、白人に対する嫌悪の感情を性的関係の上で表している。高征黒にとって、朝鮮戦争の時米軍から被った陵辱と同性愛による喪失した男としての権威とを回復することのできる唯一の方法は、皮肉にも性的関係の中でのしか求めることができない。

主人公の南靖男と同様に、行動を喪失した無気力で無希望の人物は必ず「性的人間」として描写される。それはまた幼年時代に天皇体験を持つ人間——作品におけるその代表的な人物は南靖男と高征黒であるが——に顕著である。これとは対照的に健康的で行動

的な人間、すなわち、八木沢とアラブ人に「性的人間」の持つ特徴は皆無といつてよい。

このような「性的人間」である南靖男と《不幸な若者たち》の高征黒、二人には共通している点がある。それは死に対する恐怖である。

死は空を荒れ狂う嵐だ、地上のすべては死の影にくろずんでおびえている。死が夢のなかにも影をおとして眠っている青年をさいなむ。死が象徴されている夢だ、いまおれが見ている夢、幼い時分から絶望的な恐怖におののきながらくりかえし見てきた夢、その意味は既にわかつている、死だ。宇宙のはるかな遠方、暗黒のなかに存在している小さな遊星、それへかれ一人だけが連れて行かれる。地球にすべての人間の希望がかれにかかっている。永い歳月を、かれは宇宙のはるかな遠方の遊星のうえで、全世界の人間の存在の鍵を握ってじっと耐えなければならぬ。胸が恐怖のあまりに閉塞してしまうような気分だ。

(二六九頁)

天皇体験のない若い世代には死に対する恐怖もない。言い換えれば天皇体験は死の体験と言えよう。戦時、若者において死は性的な恍惚を与えるものであった。しかし死が日常的なことになつた現代、死はそれ以上の魅力をもたらさなかつた。死に対する抵抗意識も恐怖意識も持っていない無気力な世代は、今世紀の世界を破滅の危機に落としている原水爆の危機にも無関心の態度を見せるのである。

「セヴンティーン」の中には死に対する恐怖を持っている主人公がその死の恐怖から脱出するために天皇へ帰依するという展開が見られる。主人公の《僕》は天皇への合一が死からの脱出だと

信じる。「われらの時代」の場合、希望と友情の時代である戦争期にまだ生まれていなかったこと、遅れてきた自分は戦死しえなかったことなどが吐露されている。この時戦争は「暗い夜のむこうにとどろく荒あらしい海の襲来のようなイメージ」として死のイメージと同一視されている。ここで大江の天皇観を図式化してみると、天皇Ⅱ戦争Ⅱ死というふうに考えることができる。「きわめて進化した社会においても死にとりつかれた人間たちが、危険を、ヒロイズムを、興奮を」すなわち「戦争を求めるように仕向ける」(注一〇)のであり、彼らは死の中で死を忘れ去りたがっている。戦死を、天皇への合体を望む主人公において、戦争また天皇は死そのものだと言えよう。恐怖の対象である天皇、すなわち死の中で死の恐怖を忘れようとしているのである。大江は天皇体験と彼自身の個人的な資質―敏感な感受性―から、象徴天皇が存立している現体制に絶えず否定的な姿勢をとっている。

この死Ⅱ天皇の恐怖へ駆り立てられている人間の性的行動への没入について渡辺広士は「焦りと汚辱感に満ちた狂気」(注一一)への変貌として解釈している。《不幸な若者たち》の高征黒にとつてのように戦争に負ける前までは少なくとも、恐怖と恍惚の根源であった天皇が、今は単なる象徴としての天皇に没落して実在している。更に独裁者天皇を求めている人たちが現代にいるのである。戦前・戦中の恐怖と恍惚の対象であった天皇を求めることは「自己を絶対化しようとする主人公」(注一二)の行為であり、これこそ「狂気」の発露と言える。

大江が戦後日本の象徴天皇制に対して反対の立場をとっていることは明らかである。このように大江が本心とは逆に作品の中には純粋天皇を求める主人公青年を飽きずに書いているのは、想像力の發揮によって、矛盾の様相の中に潜り込み、その矛盾を見極めようとする彼なりの努力であろう。

大江は確かに現実に絶望している。その時小説は大江にとつて絶望から脱出し得る唯一の身悶えと言えよう。現実に絶望した作家たる彼が選んだのは想像力の世界である。しかし、想像力の一面性・平面性を克服するために常に模索している大江が到達したのは終末的世界観である。

大江は、世界の終末について考えたことのない人間は、自分がどんな状況にあるか分らないと考えている。現代が世界的危機感に晒されていることも認識できない。それは想像力の欠乏に起因する。その大江において天皇制は日本人の想像力をもっとも阻んでいるものである。世界の終末に相對し得るため、実践的な作家であるためには、文学的想像力を發揮すべきだという。

敗戦後、安定期に入つた日本社会では、当時の若い世代あるいは戦後世代の世代意識・歴史意識などを究明しようとする動きとして、「戦後」というものが様々な角度から論じられてきた。

大江が「われらの時代」を発表して二年後、すなわち昭和三十六年、小説の主人公である《不幸な若者たち》という表現を用いて橋川文三は『日本残酷物語 現代編2』(平凡社)の書評として「不幸な若者たち」の復讐を書いた。橋川は『日本残酷物語』の最終巻「不幸な若者たち」に収められている青年たちの残酷な疎外の物語から、現代学生の実存的不幸を見、その原因を探っている。その結果、彼らの不幸は「ステータス・コンシャスネス(地位の意識)における不安や恐慌という心理的現実」(注一三)にあると述べている。より具体的に言うと、外部的には「貧乏」という時代状況もあるが、同時に内面的には「家族」という奇怪な原理と結びついているというのである。橋川のいう「家族」の原理とは、「日本の両親たちが、己れの歩んできた世界経験の不条理の解決をその子供たちに求める」ことであり、「日本的なメタフィジク」を孕んだこの原理の中にこそ家庭の残酷な意味が

あるというのだ。しかし注目しなければならないのは、次の部分である。

そこに家族というものは、若者に対する不断の加害者としてと同時に、あらゆる権力と制度の解体ののちにも、なお庇護をさしのべる奇怪な「神」のごときものとしてあらわれる。それは、かつて、日本の天皇制が普遍的規範において示したと同じ原理の原型を意味している。天皇制はその「赤子」を殺す作用と同時に、それを神として祭る作用を公的にいとなんだ。現在では、その原理は、無数に公立した家族」によって私的に担われている。われわれは、その「家族」を殺すことによって、われわれの為さなかったことがらに復讐すべきではないだろうか？（注一四）

ここで橋川は殺すべき家族、復讐すべき家族というふうにいっているが、その意味を遡っていくと、結局日本という国家の象徴的な存在である天皇への復讐として解釈できる。現実に挫折して自殺に追い込まれたり、発狂したりする現代青年においてその不幸の原因は、社会的現実であれ、実存的なものであれ、いずれも根本的な問題の始発点は天皇制にある。

大江にとって「すさまじく暴力的な巨大なもの」である死のイメージが結局天皇のイメージであったように、たとえ象徴的な存在としての意味しか持っていない天皇でも、いまだに日本人の意識世界に巨大な樹木のように存立し、想像力の阻害の要因となっている。

大江は現代日本を「性的人間」の国家になっていると見ている。「現代日本の青年の政治的行動の困難の根ぶかさは、性的人間の国家で、きわめて性的人間に墮ししやすい青年として政治的行動を

おこなわねばならないという、二重の罠にまちぶせされていることに由来する」（注一五）というように、大江は現代の若い世代の精神構造、すなわち戦後世代の精神構造に深く据えられている「性的人間」の要素に絶望している。「われらの時代」の南靖男と《不幸な若者たち》のような人物像には、現代の青年たちに対する焦燥と共に、大江自身の終末的な世界観からくる不安と焦燥とが微妙に入り混じっているといえよう。

4

「われらの時代」のように〈性〉的なものを取り扱って作者の社会・政治状況との関わり合いを行っている大江の作品としては、「セヴンティーン」（『文学界』昭三六・一）、『政治少年死す』（『文学界』同・二）、『叫び声』（『群像』昭三七・一一）、『性的人間』（『新潮』昭三八・五）、『個人的な体験』（新潮社刊、昭三九・八）、『万延元年のフットボール』（『群像』昭四二・一〇七）などがあり、「みずから我が涙をぬぐいたまう日」（講談社刊、昭四七・一〇）を境にして性的なものの追究は一段落していると言える。

大江が、小説の中で〈性〉的なものを通じて指向しているのは「読者の頭、意識を刺激して敏感にし、目ざめさせ、過度の覚醒状態にみちびき、反抗し、直接的、具体的にでなく、観念的に読者を昂揚させること」（注一六）だという。それから、それがなぜ性的なものにならねばならないかということについては、二十世紀後半の日常的な市民生活において、「癌や神経症とならんで、数すくない、真に危険な芽、異常の芽をはらんでいる存在」（注一七）こそ性的なるものであるからだと言っている。大江は〈性〉の問題においてはアモラルな姿勢をとり、読者に〈性〉の解放を主張しようとする。このような大江の性的な偏向は「フロイディ

ズム的な解釈」に毒されていない偏向である。大江は、フロイト的解釈について「人間の真実をどのようにでも歪めることができるものだと、心理学的なセックスのプリズムを通すとどういうお化けでも登場させることができる」(注一八)と言って、彼自身の文学を人間心理に根拠した性的欲求の多様な顕現というふうに総括することに反発する。無意識の過程と性的衝動を重視して人間の精神を分析したフロイト理論による〈性〉の解釈を拒否しているのである。大江の志向しているものは、人間の自由な精神世界を束縛する全体性を拒否し、国家体制機構から離れた地点でその腐敗を批判しようとするアメリカの戦後文学、特にノーマン・メイラー(Norman Mailer 一九二二-)が行っている、〈性〉による批判精神と相通じていると言えよう。

【注記】

※本文中の小説の引用は平成六年四月新潮社刊行の『大江健三郎全作品第Ⅰ期』(二)による。

- 一、大江健三郎『われらの時代』とぼく自身『厳肅な綱渡り』文芸春秋、昭和四十四年四月 二四四頁
- 二、平野謙『大江健三郎』『平野謙全集第九卷』新潮社、昭和五十年五月 五〇〇頁
- 三、大江健三郎『第四部のためのノート』『厳肅な綱渡り』前掲書 二二七頁
- 四、大江健三郎『われらの性の世界』『厳肅な綱渡り』前掲書 二三五頁
- 五、松原新一『大江健三郎の世界』講談社、昭和四十四年八月一〇〇頁
- 六、大江健三郎『戦後文学をどう受けとめたか』『厳肅な綱渡り』前掲書 一八三頁

- 七、対談三島由紀夫／大江健三郎「現代作家はかく考える」『群像』昭和三十九年九月 一六七頁
- 八、対談浅田光輝／橋川文三「若い世代と思想の転回」『日本読書新聞』(第一〇一七号)昭和三十四年八月三十一日
- 九、吉本隆明「もっと深く絶望せよ」『吉本隆明著作集』精興社、昭和四十一年十一月 五一三頁
- 一〇、エドガール・モラン著／吉田幸男訳『人間と死』法政大学出版局、昭和五十八年六月 三八〜三九頁
- 一一、渡辺広士「父を復元する想像力」『大江健三郎』審美社、平成六年十二月 二二頁
- 一二、同右 二四頁
- 一三、橋川文三「不幸な若者たちの復讐」『橋川文三著作集』筑摩書房、昭和六十年十一月 三〇五頁
- 一四、同右 三一〇頁
- 一五、大江健三郎『われらの性の世界』『厳肅な綱渡り』前掲書 二二六頁
- 一六、大江健三郎「性の奇怪さと異常と危険」『厳肅な綱渡り』前掲書 二四一頁
- 一七、同右 二四一頁
- 一八、「現代作家はかく考える」前掲書 一六七頁

【参考文献】

- ・北村公一『60年代ジャズ青春譜』現代書館、平成八年十月
- ・村田文一編『ジャズ・グレイツ100』PHP研究所、平成六年二月
- ・植草基一『ジャズ・エッセイ大全①モダン・ジャズの勉強をしよう』晶文社、平成十年四月
- ・悠雅彦『ジャズ 進化・解体・再生の歴史』音楽之友社、平成

十年五月

・水之江有一／小森清衛編『欧米固有名詞事典』北星堂書店、
昭和六十年九月